

# 非営利組織の組織原理について

文明と経営(2)

村 田 晴 夫\*

## 1. はじめに

この論文は前回の論文「文明と経営(1)」に引き続くものである。基本的主題は「文明と経営」であり、その内の「思想史に現れたる文明と経営」ということでは一貫しているものの、この論文の内容となる主題は前回の主題からは独立している。

産業文明を20世紀型と19世紀型に分けて考えることを試みる。20世紀文明は、19世紀文明を受け継いでそれを総括する形で大量生産に基づく産業文明を発展させた。しかし、その際に20世紀文明が19世紀文明と区別されなければならないのは、特に20世紀の後半において明らかになってきた多様化という特色である。いわば、19世紀型の文明は、政治においては民主主義の理念の追求において象徴される平等への指向と、そして経済においては、大量生産に象徴される画一化の方向とを追求してきたのに対して、20世紀の文明は多様性の追求ということにその特色がある、と言えるであろう。19世紀文明の理念がより明確になるには、アメリカにおいては南北戦争を経験し、国際的には帝国主義的ないくつかの戦争を経験しなければならなかったのであり、また一方で、機械技術の進歩を待たなければならなかったのである。それらの戦争は20世紀前半にまで持ち越され、管理の技術を含めての技術の進歩もまた、大量生産の完成には20世紀へと持ち込まれざるを得なかった。とは言え、民主主義の平等の理念の顕在化と大量生産への指向性は19世紀の精神なのである。

19世紀の精神をこうして取り出してみると、政治的な理念については恒に精神的なものが優

先するのに対して、経済的理念の方は精神的なものを物質面に置き換えて追求することができるという便宜性がある分だけ、技術に転化することができるという具体性がある。逆に、一旦物質的な面での実現を見たときには、途中で引き返すことは困難であり、おそらくそれを取り替えたり止めたりすることはできない。そして、自由と平等の理念が内包する矛盾——自由を徹底的に追及しようとするすると平等に抵触し、平等を守ろうとすると自由に対する制約を必要とするという矛盾——は19世紀的経済理念においても内在的に包含されており、画一的大量生産の完成はすでに個別的・個性的な商品を潜在的に内包し、多様性の時代を用意していたのである。

一つの論理の貫徹は、恒にもう一つの論理(Alternative Logic)への指向を生むのである。

このことは次の二つのことを含んでいる。第一に、社会全体において顕在化してくる論理に対して、恒に、それだけでは社会の全体を包括できないという不完全性が残り、もう一つの論理が要請されるということである。そして第二に、そのもう一つの論理の要請を受け止め、一定の形にして行くためには、人間の側にアプリオリな原理としての何ものかがなければならない、ということである。

この論文では、現代資本主義が内包する指向としての多様性に注目することと、それを通して、資本の論理とは異なるもう一つの論理として要請される非営利組織の組織原理について、その組織原理の外在的原理と内在的原理について述べるのが目的である。外在的原理とは、現代資本主義の論理が要請するもう一つの論理そのものであり、内在的論理とは、それを受け止めて顕在化させる人間の論理である。

われわれがここで注目する19世紀の文明を簡

\* 本学経営学部

単化して画一技術の文明と呼ぶとすれば、20世紀の文明を表すことばは多様性の文明ということである。画一の時代を総括し、代表するのはF.W.テイラーとH.フォードである。これは次の多様性をもたらす前段階として、いわば必然の過程であったのである。そしてここにはすでに多様性が潜在的に内包されていた、といつてよい。それは資本の論理と結ぶことで容易に多種のモデルの生産へと移行するのであったし、多様性を前提にした経営戦略（あるいはマーケティング）の時代、すなわち生産から消費への比重の移動ということに現れるのであった。経営的心性とはまさにこのようにして登場するのである。これについては前論文「文明と経営(1)」でも触れておいた。今一度繰り返すと、この時代、すなわち画一性から多様性へと移行するこの時代、F.W.テイラーとH.フォードを含み1930年代にまたがる時代、こそ経営概念の顕在化の時代なのであり、経営学が成立し、発展してくる時代なのである。ここにもまた、文明と経営のテーマ的要請を読み取ることができよう。

## 2. 非営利組織の外在的組織原理

### ——多様性の時代における「もう一つの論理」への指向

#### 2.1 文明の形式とことば

ことば、この不可思議なるものは、文明の発展の基礎ともなり、また絶えずわれわれを悩ませてきた。

人間はことばを生み、ことばは人間を生む。人間の生活は文化を生み、文化は生活の根幹を支えた。生活と文化は人間の活動を組織的ならしめ、社会的なものにする。文化はことばに意味を与え、そこからさらに新しい価値としての作品を生み出した。同時に、新しい混乱も生み出す。人間の意識が表出される大きな通路はことばであり、ことばを通して現れる意識と無意識はひとを幸せにもし、傷つけもする。過剰な意識は傲慢となり、それらがぶつかり合うことによって争いが起こる。バベルの塔を作ろうとした人間たちは、傲慢のゆえにことばの乱れとなってばらばらに引き裂かれざるをえなかった。

しかし、ことばがひとつの合理性によって導かれ、その合理性が個々の傲慢を抑えるとき、ことばはもうひとつの力を獲得する。合理性によって導かれたことばのなかで、これまでの歴史上最大の例は言うまでもなく「科学の言語」であり、それに導かれる形式をもつところの「技術の言語」である。もっとも、「技術」というとき、それはすでに合理的な伝達の形式をもつものであることが内包されているのであって、それに立脚しつつも非合理的な——言語的伝達を超えた——現場の匠の仕事は、アート（技）と呼んで区別するのである<sup>1)</sup>。合理性に導かれたことばとしての社会科学的な代表は「法律のことば」である。そしていまひとつの代表例を挙げるならば「会計の言語」である。社会科学が対象とする合理性に導かれたことばには、次第に人為的な要素が強くなる。そして、人為的な色彩が強く反映している言語としての代表は「コンピュータの言語」である。これこそ徹底的に人為的であり、いまや地球上の人類の生活を支配してきている。

このような合理性に導かれたことばによる生活の支配的な形式は、われわれが文明と呼んでいるものの一典型をなす。産業革命によってもたらされた文明はことばとしては「技術の言語」によって形式を獲得してきたのであるが、情報化が革命的に進行しつつあるこの時代にあっては、産業革命による「技術の言語」の中から、デジタルなものをとりわけ強調して肥大させてきている。「情報言語」というこの新しい合理的言語はわれわれの生活にこれまでになかった新しい形式を着せ掛けているのである。この着物も容易に着替えることはできないハードな形式である。

文明はなによりも形式を持つことにその特色がある。ひとは、文明の与える形式によって生活の形を作り、それに支えられて生活を営む。このような見地に立てば、文化と文明を分けて、文化は生活の実質であり、文明は生活の形式である、というようにも言うことができようが、

1) 村田晴夫『管理の哲学』文真堂、1984、118頁以下。

われわれは文明を、文化を含む広がりをもつものとして定義してきた。前者を狭義の文明、後者を広義の文明、としてもよいであろう。この論文で断りなく文明と言った場合は広義の文明を指す。19世紀文明とか20世紀文明というように言う場合はこの広い意味での文明を指すことはもちろんである。

## 2.2 テイラーと19世紀の精神、そしてベルクソンの見方

テイラーの科学的管理法は人間の仕事に一定の形式を与えた。それは仕事を分節し、それらに脈絡を与えることであった。これはまさに言語の構文論的分析そのものであった。仕事から人間の意味を剥奪し、仕事の文章の構文解析(パージング)をなした上で、改めて意味を再付与しようとしたものである。そのとき付与された意味の基準はお金(賃金)であり、差別出来高払制賃金という意味づけであった。19世紀文明の総決算がここに現れている。19世紀文明の形式は、ものごとを単純化して行くこと、それをさらに再構成して全体を構築すること、そしてその意味づけは経済価値によること、これである。これが産業文明の基本形式である。この合理的な形式は、文化の多様性を生み出すこともできたに違いない。仕事と生活は分離する。それは一定の豊かさを表している、と言ってよい。豊かさ以前の生活は仕事に追われてゆとりに欠け、「万人の万人にたいする戦い」の様相であったからである。この科学的管理法の精神はH.フォードをして大量生産の成功を可能ならしめ、ここに19世紀文明の完成がもたらされたのである。単純化された仕事と大量生産、そして高賃金による生活の豊かさ、これこそその帰結であった。

ベルクソンはこの現象を次のように捉えている。

「生産物の画一性という点については、もし仮に時間と労働の節約が国民全体の規模で実現され、そこから知性の陶冶が推進され、また真の独創性の伸長も可能になるとすれば、画一性は損失だとしてもとるに足らないだろ

う。世人は、アメリカ人のかぶっている帽子はどれもこれも寸分違わぬ、などと言って悪態をついた。だが帽子よりは頭のほうが大切なはずである。私なら、自分の頭の中味を望みどおり豊かにしてもらえるのなら、頭にのつける帽子は規格品でいっこう構わない。」<sup>2)</sup>

世界恐慌に見舞われていた1932年の頃、ベルクソンの目にはこのように映っていたのである。

しかし、すでに多様化は始まっていた。H.フォードのもたらした大量生産の画一性は、ジェネラル・モーターズ(GM)の社長A.P.スローン Jr. の、各種のモデルを揃えるというフルライン政策によって破られ(1927)、画一的な規格品だけの時代ではなくなっていたのである。その後続く多角化、多品種少量生産、などということが、画一性の時代から多様化の時代に進んできたことを表している。ベルクソンは大量生産による画一な時代の、精神的多様性を願ったのであるが、残念なことにその期待は裏切られ、物質的・エネルギー的商品の多様性に席を与えることにしかなかったのである。ベルクソンもまたこれを読みとっている。

「私は、産業主義が切実な欲求の充足手段を大いに開発してくれた点で人間に施した恩恵は否まず、ただそれが人為的なものを力づけすぎたこと、奢侈にまで突っ込んでしまったこと、そして都会に依怙臆屈して田園を荒廃させてしまったことを咎めたい。最後にまた、産業主義が雇い主と労働者、資本と労働との隔たりを拡げ、双方の関係を変えてしまったことを咎めたい。」<sup>3)</sup>

人為的欲求は膨張の一途をたどり、田園は荒廃すること、そして社会はますます格差のついた不平等な社会になるであろう、これをベルク

2) Bergson, H., *Les Deux Sources de la Morale et de la Religion*, Presses Universitaires de France, Quadrige, 1990 (1re édition 1932), p. 327. 森口美都男訳「道徳と宗教の二つの源泉」『世界の名著ベルクソン』中央公論社, 1969, 528-9頁。中村雄二郎訳『道徳と宗教の二源泉』白水社, 370-1頁。訳文は森口訳によりつつ、一部変えてある。以下同様。

3) *Ibid.*, p. 327. 森口訳, 529頁。中村訳, 371頁。

ソンは問題にしている。ベルクソンの心配している資本と労働の格差についても、所有と支配の形態の歴史的推移とともに、大きな変化があった。その変化はいまも進行中である。産業化のこういう変化は歴史上いかにして始まったのか。この引用にひきつづいてベルクソンはつぎのように語っている。

「(産業社会の精神の基となる) 発明精神を、力強く前方へ衝き動かしたものは、ほかならぬ民主主義の息吹だった」<sup>4)</sup>

誰でも参加できる民主主義による人間の力の解放がもたらしたものが、機械技術の力であり、それによって解き放たれるのが人間の物質的欲望である、とベルクソンは考えている。

誰でも経済の競争に参加できる経済的民主主義の社会、その淵源は知らずとも、いまわれわれはそれを多様化の時代として経験しつつある。人には等しく経済競争に参加する機会が与えられており、決定には市場が力を発揮する。経済競争の自由と平等は人間の力を解き放つであろう。新しい時代の足音が聞こえてくるようだ。しかし、その音調はベルクソンの期待した音調ではない。その反対の音調である。ベルクソンの期待した音というのは次のようなものであった。

「人類はこれまで熱狂的に生活を入り組んだものにしてきたが、それと同じく熱烈に今度は生活の簡素化に乗り出さねばなるまい。」<sup>5)</sup>

多分、簡素化とは異なった道をたどるであろう。入り組んで奢侈な生活を続けつつ、地球環境の破壊につながらないと思われる製品を調達するグリーン調達などをシステムに組み込むようなやり方で、人間は合理的精神に導かれた文明の制度を考え出すであろう。

経済民主主義の時代には人間一人ひとりが大切にされる。それはしかし、精神としての人間を大切にするのではなく、物質としての人間であり、購買力をもった個人としての人間を大切にすることでしかないのである。多様化はこのように進む。一人ひとりを経済的主体として大

切にし、品物を売りつけ、サービスをおしつける。経済の競争原理はベルクソンが危惧したものとは異なった格差を産み出す。競争には勝者がいるし敗者がいる。しかし、多様性の時代の経済競争原理が産み出すのは単なる敗者だけではない。その人の責任ではなくて負の財を押しつけられるということが起こる。産業廃棄物を巡る問題が各地に起こることを見ればよい。文化という地域の心を見捨てるということが起こる。人間個人の間に格差がさまざまな形で入り込むだけではない。国と国の間にも格差が生ずる。競争は一部の人間達のものとなり、他の多くの者達は参加の機会が開かれているという原則だけを聞かされて、競争の外に置かれる、という事態になる。現在、地球上の数十億の人間達の中で、経済的自由競争に参加できる人口はその中の一部だと言ってよいであろう。この構図は将来変化して、大部分の人達が参加できる、そういう意味での真のグローバル化が達成できるであろうか、否、そうはならないであろう。理由はいくつもある。第一に、地球環境問題がいまのような経済競争を許さないだろうということ。第二に、地域あるいは国の、また民族の文化性が一様なグローバル化には抵抗するだろうということ。第三に、人間性の抵抗とでも言うべきものが働くだろうということ。その他である。この人間性の抵抗というのは、倫理観または価値観の次元での抵抗がさまざまに働くことであり、第二の理由で挙げた文化性と重なってくる。文化性というときには組織された集団とか地域、民族というレベルで考えられる価値観であるが、第三の理由で挙げているのは主として個人レベルでの価値観あるいは人間性の問題である。ここでは質から量への転換のようなものが想定される。すなわち、一人ひとりの価値観に内在するものが、あるときから外面的に顕在化して、組織された集団を作る、ということである。非営利組織(NPO)あるいは非政府組織(NGO)の組織原理のひとつがここにあるのである。

このようにして導かれる非営利組織の組織原理は、時代の要請として外部から促されて出現

4) *Ibid.*, p. 328. 森口訳, 530頁。中村訳, 372頁。

5) *Ibid.*, p. 328. 森口訳, 529頁。中村訳, 371頁。

する原理であり、非営利組織の外在的組織原理というべきものである。

### 3. 非営利組織の内在的組織原理 ——自由意思と決定論の視点から

#### 3.1 バーナード理論の出発点としての自由意思論と決定論

現代資本主義が、情報化という形式の着物を着て、グローバリゼーションという波によって地球全体に運ばれるとき、形式としての文明の様式には大きな変化が現れる。それは現に起こりつつある。しかし、その着物を着るのはそれぞれの文化特性をもったローカルな地域社会であり、その中に住むそれぞれの生活者である。同じような着物を着ていても、それぞれの中味にはそれ固有の心と文化があり、それはしばしば衝突を引き起こす。

グローバリゼーションを経営の視点から見ると、「自由」ということが最も根底的な問題として浮かび上がってくる。人々が自由に交流することがグローバリゼーションの第一である。これは労働市場の自由化ということを含む。モノの自由な行き来が当然その次にくる。そしてカネが自由に交流するようになる。資本の自由化が当然のこととなる。情報の交流は当然それらについてまわる。そうして情報化の巨大な波が地球を覆うとき、その形式を利用して、ヒト・モノ・カネの自由交流はごく当たり前のこととして日常化する。

「自由」とは何か。われわれは改めてこの問題の前にいるのである。

人間には自由意思がある。ただしそれは限られたものではあるのだが……ということがバーナードの理論的出発点であった。

人間は何を肯定し、何に依って生きるのか。その肯定し、依って生きるものによって人間は縛られるのである。しかし、人間は何にも依らずに生きることはできないのだから、自らを束縛することによって他のものから自由になるのである、とも言える。限定された自由意思ということ、そういうように解釈してみよう。人間は誰でも個人としての肉体をもち、自分の自

由意思ではないところの与えられた環境のもとに生を得る。いつの時代に、どの国に、誰を両親として生まれるのか、自分で選ぶことはできない。その生得の肉と環境の下に生きて行くべく決定されているのである。それを肯定し、そこから出発することによって彼（または彼女）は自由になる。しかし、彼（または彼女）は絶えずその環境の原点に回帰する。精神の成長とともに、その回帰は彼（または彼女）の歴史に刻まれて、精神的原点のなかに定位されて行く。それが自我であり、アイデンティティである。その精神的歴史を形成する環境の原点には、彼（または彼女）が両親から生まれたということから既に社会的原点というべき、人間と人間の社会的関係——

すなわち組織の原理——が組み込まれている。わたくしはこのような社会的関係を、さらにその構成原理までさかのぼって捉え、社会的関係に代わって「組織」という名称で、以後、整理して行きたい。すなわち組織とは人間関係の調整された場であり、その場を構成する複数の人（構成員と呼ばれる）に共有された意識がある。その意識の中心となるのが共有された意思であり、それがさらに明確になったものが目的と呼ばれるのである。したがって、人間の社会的関係が組織であるかどうか——組織ではない社会的関係もある——を調べる手軽な方法は、共有された目的があるかどうか、または共有された意識があるかどうかを調べればよいのである。

両親の彩なす関係は、その基底において共有された意識がある。したがってこれは組織なのである。すなわち、人間は誰でも、その原点に組織という要因を含みもっているのである。そういう原点的な組織に受け入れられることが人間の原初的欲求のなかにあるのである。人間はそういう原点に立って、自己の歴史を形成して行く。制約された原点に縛られつつ、かえってそこから自由になって、運命に立ち向かって行くのである。意識は彼（または彼女）の固有のものとして育って行く。共有された意識を基礎にしなが、かえって固有のものに成長するの

である。

バーナードの視点を敢えて敷衍すれば以上のようなものになる。これは大いに文学者と共有された視点である。人間とは何か、それを文学者は文学というやりかたで語ろうとするのにたいして、組織論的な社会学者は哲学的な考察を踏まえて語るのである。そこから先は、あるいは科学的になったり、哲学的になったりするであろうが、いずれにしても理論的であり、バーナードのようにその中間を試行するやり方を取る者もいる。それは科学の客観主義のやり方に限界を感じる社会科学指向の研究者にとっては魅力のあるやり方なのである。

### 3.2 自由と決定——メルヴィルとバーナード

人間は与えられた生得的環境のなかで生を受け、次々にやってくる自分の意志ではない事態——それを運命と呼ぶ——に立ち向かって行くのである。自由意思論と決定論というのは、言い換えれば運命とそれに立ち向かう人間、ということである。

ハーマン・メルヴィルは1851年に有名な『白鯨 (Moby-Dick)』を書いた。この物語の主人公エイハブ (Captain Ahab) は自分の片足を食いちぎった白い巨鯨 (Moby-Dick) にたいする復讐の念に駆り立てられて自分の生を生きるのである。これは運命に立ち向かう男の執念である。その末路は巨鯨によって滅ぶのであるが、しかしその物語の語り手イシュマエル (アブラハムの子にして奴隷の子、彼の追放されしイシュマエルの名をもつ男) は、親友である異教徒の快男児クイーケグの棺桶によってひとり救われるという運命を担うことによってこの数奇な物語がわれわれに残される、という筋書きである。谷本泰三教授は、この物語がまさに人間の自由意思と決定論の相克の問題であり、その彼方に真の實在があるのだが、それはある種の人間には見ることがある、それをメルヴィルは見ている、そしてことばにはできないこの真の實在を小説で表現できると信じて、それを追求したのだ、と解釈している<sup>6)</sup>。この見事な解釈に乗って言えば、われわれが経営学史の分野で追求す

る学説の解釈においても、たとえばバーナードの人間論の解釈はまさにこれと軌を一にする。バーナードは何か真の實在を見ていたのであるが、彼はそれを語るときに組織論という彼独自のことばを作り出さなければならなかったのである。そのことばには、ウィリアム・ジェームスからのことばがあり、ホワイトヘッドからのことばが含まれているとしても、組織を語り、人間の協働を語るときには彼自身のことばになっているのである。そして彼はこう締めくくるのである。

「かような物語は終局的には、信念の表明を必要とすることになる。私は人を自由に協働せしめる自由意思をもった人間による協働の力を信じる。また協働を選択する場合にのみ完全に人格的發展が得られると信じる。(中略) 協働の拡大と個人の発展は相互依存的な現実であり、それらの間の適切な割合すなわちバランスが人類の福祉を向上する必要条件でありうと信じる。それは社会全体と個人とのいずれについても主観的であるから、この割合がどうかということは科学では語りえないと信じる。それは哲学と宗教の問題である。」<sup>7)</sup>

### 3.3 自由意思の成長

さてわたくしは、自由意思というものは与えられた運命というものによってかえって成長する、と考えたい。しかしその成長にはおおよそ二種類のものがあるのであって、第一の種類は、成長過程で成長の父である運命を忘れる、という不遜な成長であり、第二の種類は、それを忘れず謙虚である、という種類のものである。人間のもっている不遜さは、それ自体、研究に値する問題である。それは利己心と深く関わっているであろうし、また合理性とも無関係ではな

6) 谷本泰三「船長エイハブの死、水兵ビリーの生——ハーマン・メルヴィルと恩寵」桃山学院大学最終講義, 1998-1-14。

7) Barnard, C. I., *The Functions of the Executive*, Harvard University Press, 1938, p. 296. 山本安次郎, 田杉競, 飯野春樹訳『経営者の役割』ダイヤモンド社, 1968, 309頁。

い。いずれにせよ、不遜というものはどこかで人間の——あるいは生命体の——本質的なものと関わっているように見える。言い換えれば、不遜は殆ど不可避免的に人間の日常に現れるのである。それは外面には傲慢として現れ、あるいは自己中心主義として現れる。

しかし、たとえ不遜であれ、自由は制約の上にものみ成立する。そして自由意思は自己の固有性を侵害されないことを最大の目的として成長する。そのとき、自己の固有性（アイデンティティ）というのはまさに運命の上に成立しているのであり、両親という原初的組織形態の上にものみ自己は出現するのである。ここに組織原理の原初的根拠があり、これは内在的組織原理と呼んでよいであろう。

営利組織であれ、非営利組織であれ、この原理が貫徹しているはずである。

元来、非営利組織は営利組織ではない組織に冠せらるべき名称であり、家庭という最も原初的な組織もまた非営利組織なのである。むしろ、非営利組織の方が組織の基本的なものを先に持っていたのであって、組織論研究がたまたま企業組織の研究に力点が置かれていることから、「非」営利組織という後発的名称が与えられたに過ぎない。

#### 4. 結び——とりあえずの

家庭は組織であるということが必ずしも一般に定着しているようには見えない。組織（公式組織）の成立の必要十分条件は、共通目的をもつこと、構成員一人ひとりに協働意欲があること、コミュニケーションが成立していること、この三条件である。この三条件のうち、分けても大切なのが共通目的である。家庭の目的は何か。それは「愛・協働」を育て、守ることに他ならない。いま、世界的にここが揺らいでいる。「愛・協働」を忘れ始めたのである。

内在的組織原理そのものが揺らぎ始めている。これこそ最も重大な文明論的問題である。それは自由意思と決定論に挑戦する問題である。自己の運命の基本を放棄することである。運命の基礎を放棄することは運命に立ち向かって行く

ことではない。それは自己の自由意思の成長を歪めることである。

この論文では、非営利組織の組織原理について考察した。そして外在的な組織原理として現代資本主義社会の諸要因が、かえって非営利組織の成立を促すということを導き出した。経済的自由競争の論理が貫徹すればするほど、そこには強くて一時的な勝利を収める者がいると同時に、それによって弱い立場に置かれるもの（人間だけではなく、自然環境とか、地域社会の固有の文化とかも含めて）が現れる。この、いわば弱者の論理が社会的・文明論的に要請されてくることが、これが非営利組織の外在的組織原理である。一方、内在的な組織原理というものを、自由意思と決定論の相克において見出した。それは人間の個の内に保持されているところの組織原理であり、人類の、そして民族の、また文明の歴史を担っている原理である。その原理の結節点が家庭なのである。

組織には恒に個人性に先立つ全体性ということが付随している。全体性は統合として現れ、秩序として定着する。統合ということがなければ組織とはならない。統合の理念が共通の目的であり、それへの具体化の本質が個々の成員の貢献意欲である。そして全体と個とを結びつける役割を果たすのがコミュニケーションである。家庭における「愛・協働」はひとつの全体性を表している。この論文では十分に展開する余裕がなかったが、コミュニケーションの本質である「情報」ということについて述べてこの論文を閉じたい。それはとりあえずの結びに対して、次の「文明と経営」への接点を明確にすることでもある。

この論文で述べてきたように、数学と自然科学は純粹に合理的な言語の世界を提供してきた。これが近代世界の文明の骨格になっていることは言うまでもない。20世紀の後半には、人類はコンピュータ言語という新しい言語を生み出した。それは産業社会に情報化をもたらし、文明に新しい装いを与えようとしている。この新しい文明の装いは、近代世界の既存の合理的形式にもさまざまな影響を与えつつある。学問の形

式をなす言語はさまざまに分化して行こうとしているし、技術もまた、それと並行してことばを生み、細分化して行こうとしている。たとえば会計学における言語的な理論と実践の発展は特筆すべきものがある。ことばこそ、情報の最も基本的な表現の形式なのである。それについてはすでに詳論しておいた<sup>8)</sup>。

「情報」の本質的な機能のひとつに、個と全体を結ぶということがある。全体性と情報とは不可分の関係にある、ということが大事な要点である。情報化が進むと、個々の多様性がますます浮き彫りにされて、社会の統合的全体性が見えなくなるという懸念があるけれども、情報

の持つ本来の全体性は組織の、そして社会の、新しい全体性の回復の契機ともなれる可能性を持っている。自由な社会における統合の原理、そして、この統合の原理というのは、ただに人類のみならず、自然環境をも内包する原理でなければならないのだが、それをいかにして見出すのか、これがいま、人類に課せられた課題なのである。情報のもつ可能性を視野に入れつつ、調和の調和という概念、すなわちホワイトヘッドの平安 (Peace) の概念、を具体化する新しい理想と制度とを探究すること、具体的にはここにわれわれの課題があるのである<sup>9)</sup>。

8) 村田晴夫『情報とシステムの哲学』文真堂, 1990.

9) 村田晴夫「経営倫理とグローバリゼーション」『経営倫理学会誌』第5号, 1998. をも参照されたい。